

ふと、今日如何なる地理書にも記述せられて居る程の都會に近づきながら、此の地に立ち寄りなかつたとは如何にも承認し難い事であるからである。誠に、北方から來る旅客は誰しもゴルバンド川とパンヂール川との合流は眞南に流れてカーブール・ロガル Logar の合流を併せ、それからインダス河に達するものと豫想するであらうが、事實はこれに反し、湖底であつたカピシヤ盆地の南側が凸起してカーブール盆地との間に小山脈を形成し、流水の通過を遮斷してゐる。従つてヒンヅクーシユ山に源を發する河流と古代のカピシヤ湖とが山を縫ふて其の排水路を求めたのは南方に向つてでなく東方に向つてである。バームヤーンから印度に直通する道も亦同じく東方に向つてゐて、ペシヤワールに行く隊商はどうしても之れを通り、カーブール迂回を避けて居る有様である。さういふ譯で、西域記にも明記してある通り、玄奘法師も東方に進んだことは明白である。

玄奘から約千年以前、アレキサンダー大王が印度に遠征した時にも、矢張り同様ではなかつたかと思ひたい。バクトリア遠征に當つては往復共に、暫